

「標準放射線医学」第4版

千葉大学教授・放射線医学 有 水 昇
金沢大学教授・放射線医学 高 島 力

岡山大学教授・放射線医学

平 木 祥 夫

このたび、千葉大学・有水 昇教授、金沢大学・高島 力教授の編集による「標準放射線医学」第4版が出版された。本書は1982年に第1版が出版されて以来、日進月歩の勢いで発展を遂げている放射線医学に後れを取ることなく、読者に最新の知識を得てもらおうと3年ごとに改訂されている。一口に3年ごとと言っても、日常の仕事に忙殺されているであろう編集・執筆の先生方のお立場を考えると、大変な御苦労があると思われる。しかし編集者の意気込みと優秀な執筆陣の熱意によって、本書が常にup-to-dateな放射線医学の教科書として、全国の医学生および研修医諸君から多くの支持を得ていることは、大変に素晴らしいことであり、深く敬意を表したいと思う。

今日の医学教育は、“臨床の場で役立つ”ということに重点が置かれており、今回の医師国家試験ガイドラインの改定にもそのことがかなり反映されている。このために、全国各大学の臨床医学科のカリキュラムも系統講義の時間はむしろ短縮され、small groupによる臨床実習中心の教育が重視されるようになってきている。もちろん、放射線医学もその例外ではない。一方、医師国家試験においては各科の間の壁が取り除かれ、従来の必須科目と選択科目

という分け方はなくなり、常に画像診断は重要であり、その占める割合がより大きくなったと思われる。

近年の放射線医学の進歩には目覚ましいものがある。私が入局した30年ほど前には、放射線科の診療と言えば、X線診断ぐらいなものであり、内科の補助的な科という印象が強かったように思われる。しかし、現今ではX線CT、超音波のみならず核医学や核磁気共鳴までもが、多くの病院の日常の診療に取り入れられており、それらの診断学に加え、診断手技を応用した治療法という新しい分野も発展し、また従来からの放射線治療も手術、化学療法、温熱療法などとの組み合わせにより放射線腫瘍学と名を変え、悪性腫瘍治療の重要な方法として進歩し続けている。

これらに関する情報量は、年々膨大な量となっているが、それらを限られた時間の中で医学生諸君に教え込むのは誠に大変なことである。このような状況において、豊富な情報の中から特に必要なものを上手に整理して、そのエッセンスを無理なく知識として覚え込ませることが大切であり、本書はその目的に即した教科書として出版され、改訂を重ねてきた。

今回の改訂では、医師国家試験ガイドラインの改定に即応して診断各

論を検査法別に再編し、異常像のパターンから診断に至る思考過程にポイントをおいている。また、画像診断サインには、その写真と説明だけでなく、及ぶ限りシェーマを付して理解を一層容易にし、超音波、X線CT、核磁気共鳴については、更に内容を充実させている。放射線治療についても、臨床腫瘍学の知識がより一層深まるように工夫されており、腫瘍の進展度については、最新版のTNM分類に統一すると共に、対照しやすいよう巻末に部位別・腫瘍別のTNM分類の一覧を付している。改訂に当たっては、新たに7名の執筆者を加え、放射線医学の急速な発展にも対応している。

旧版と同様に、医学生諸君の系統講義、臨床実習および卒業試験、国家試験対策としてのみならず、これから本格的に放射線医学を志す若い医師にもぜひ一読して欲しい教科書として広く推薦したい。また本書は、放射線科以外の臨床科に進まれた医師が、放射線医学の最新の知識を得るにも格好の書であり、座右に置いておかれれば利用価値は高いと思う。

● B5 944頁 図509 写真1508
原色図1 1992 定価10,300円
(税込) 円400円

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)